

## リレーエッセイ「橋本道夫先生と私」(第7回)

### 科学と政策の距離を教わったモスクワ



(公財)地球環境戦略研究機関 参与 西岡 秀三

1988年から始まったIPCC(気候変動に関する政府間パネル)第1次報告書取り纏めの約3年間、第2作業部会副議長に選ばれた橋本道夫先生のカバン持ちで部会が開催されるモスクワやジュネーブ通いの間、折に触れて先生の薫陶を得る機会を得、先生の長い国際環境政策経験に裏付けられた見事な采配が、混沌のモスクワでIPCC報告書誕生を成功に導くのを目の当たりにした。

人間社会の森羅万象にかかわる「気候」を対象に、どうやって世界中の知恵を集めるか、利害錯綜する国際関係の中でどう政策を打ってゆくか。人類の知恵が試される大規模な政策プロセスがはじまった。「科学」の第1作業部会は早くから国際学術連合や世界気象機関のもとでの国際共同作業に慣れている。これにひき替え影響評価の第2作業部会は、農林業・生態系・水資源・都市とあらゆる異分野の専門家が集まって、言葉の定義からの議論がはじまる。国境を越えて「不偏の真理」を求める自然科学と違って、国によって環境が違いうし、価値観が異なるから議論は拡散し、国益がにじみ出る。

毎朝食時の打合せでの、科学的知見を行政としてどう判断して政策に具現化するか、IPCC現場でのon the job training 橋本講義は、その後20年にわたる私の温暖化研究の精神的背骨を築き上げるものであった。まずは科学から得られるファクトの尊重、環境科学における不確実性の取り扱いの重要性、そして専門的知識に閉じこもることのない幅広い知識集約の必要性、政策に落とす時に人それぞれが持っている価値観、信条、社会的立場が異なることをよく理解して実施行動に向けさせることの効果等、研究のありかたについての熱のこもった尽きることのないお話であった。

この橋本副議長の信念が、第2作業部会ひいてはIPCCの影響評価確立に大きく貢献した。この時期のロシアと言え、じっくり科学的議論をするには最悪の時期で、85年ゴルバチョフ改革開始、86年チェルノブイリ事故、89年ベルリンの壁崩壊、1988-91年の共産党解散とソ連の末期、ロシアに移行の大混

乱の時期であり、町へ出て食料品店に入っても売り子はほんやり立ってはいるが、陳列棚にはめったに食料品が見つからなかった。

これが第2作業部会を危機に陥れた。議長はソ連国家水文気象委員会議長Yuri Israelであった。議事打合せに議長室に入ると、壁に張られた3メートル四方もある大きな地図に赤鉛筆で放射線量の等高線が引かれていた。チェルノブイリ事故対策の責任者でもあったが、初動の遅れが批判されていたらしい。

議長は、科学の内容についても、報告書作成のプロセスでも、科学の正当性より自国の意向を強く打ち出してきたが、これこそIPCCの精神をないがしろにする。影響予測評価には、気候の将来シナリオが不可欠であるが、議長は著名なソ連気候学者ブディコ(GI)の古気候解析データに基づくシナリオを強く推し、一方欧米学者はこの気候変動構造は過去の出来事とは全く異なるから大気大循環モデルを使うべきと主張し、大論争があった。結局両論併記となったが、報告書の多くの論文は後者にもとづいている。各章執筆者をどう決めるかは極めてセンシティブな案件であるが、何と議長は全ての章責任著者にソ連科学者をおしつけてきた。IPCC全体として著者選定プロセスが明確に決まっていなかった時期ではあった。

議長は、政治的に立ち回るだけでなく、温暖化懐疑論者に近く、温暖化があっても適応可能と議長席で言い切る無責任であった。幸か不幸か、議長はロシアへ移行に関する重要会議によられたと、突然あとを橋本副議長に任せて出て行ってしまふことが相次いだ。結局半分以上の議事は橋本先生が仕切ることになり、カバン持ちの仕事も大変になったものの、橋本議長の采配は科学的根拠についてはきびしく問い、それぞれの国の関心事には政策の立場からきちんと対応するものであったから、途上国の参加者からの信頼も大きく、先進国の科学者も納得するものであった。日本環境省が全面的に支援し、橋本先生がリードした第2作業部会報告が温暖化リスク評価の糸口をつけ、IPCC報告書の基盤を築いたのである。